「百石」の由来

四戸松三郎著の「百石風土記」には、次のように記されています。

「百石」＝何と読みましょう、何時、誰が「モモイシ」と読むことにしたのでしょうか。石が沢山ある場所ではないし、ヒャッコクの石高の処でもなく、どんな意味でしょう。この地名について研究されていたジョンパチラー氏は、「アイヌ語より観たる日本地名研究」に、古来日本の地に住んでいたある民族がありました（都母族か）。そこへまた新しくもっと文明を持った民族が移住してきました（大和族）。

しかし、便宜上また勢力などが関係し、その他その当時の事情から特に地名なども先住民族と同じ呼び方をして之を用いていたものであります。しかし時代の進展と共に文字が用いられる様になるに従ってついに文字を当てはめたのですが、永い年月の間に多少の変遷を経て今日の漢字の地名を成すに至ったものと考えられるのであります。

百石の読み方については、「奥々風土記」に「百石村、母々伊志を云う」と示しています。

さて、この百石については、前記の「アイヌ語より観たる日本地名研究」及び磯部精一著「和愛、愛和アイヌ語事典」の両著を参考として意味を考えてみるにMoMoishiとすれば流れが緩やかな甚だ曲りくねった川と解されます。

地名の由来となった、十和田湖を源流とする奥入瀬川は現在も豊かに流れております。

平成９年／百石町航空写真

百石音頭

作詞：佐々木　誓子
補作：百石音頭制定審議会
作曲：猪俣　公章
編曲：岩代　浩一

一、ハアー
春は桜の明神山よ
まちの娘(あねこ)の気も弾む
サテ
かすむ松原海原遠く
北海通(ほっかいがよ)いの船が行く
チョイト　船が行く

二、ハアー
夏はみどりの根岸の銀杏
清い流れの瀬もぬるむ
サテ
浮かれかじかかあの娘(こ)の声か
百石音頭で夜が更ける
チョイト　夜が更ける

三、ハアー
秋はまつりの鎮守(ちんじゅ)の杜(もり)よ
いきな若衆の身も踊る
サテ
稲穂(いなほ)波打つ百石原(ももいしばら)に
恋と黄金の花が咲く
チョイト　花が咲く

四、ハアー
冬は氷の銀盤(ぎんばん)の上に
老いも若きも気が弾む
サテ
街に師走のあかりが灯(と)もりゃ
繁盛繁盛(はんじょうはんじょう)で歳がゆく
チョイト　歳がゆく

（昭和53年3月9日制定）

百石町民歌

作詞：谷崎　與悦
補作：百石町民歌制定審議会
作曲：間宮　昭佳
編曲：坂下　滉

一、甲田峰高く　西空に
南部ひろ原　緑濃く
その名もゆかし　百石の
うるわしき町よ　わが故郷
豊かな恵み　地に満てり

二、奥入瀬川の　水清く
稔り田遥か　風渡る
根岸の森の　大銀杏
拓けゆく町よ　わが故郷
千年の誇り　伝うなり

三、太平の波　寄すところ
あかねの空に　日は昇る
夢は未来に　羽ばたいて
栄えゆく町よ　わが故郷
ああ新たなる　息吹あり

北緯四十度四十分　住んでみたい町

作詞：星野　哲郎
作曲：杉本　真人
編曲：小杉　仁三

一、国際電話に出てきた女(ひと)に
ジェラシー感じる　私なの
北緯四十度四十分　フロム百石
トゥ　ニューヨーク
見えない絆で　結ばれてても
あなたのやさしさ　気になって
枕を返す　ハマナスの宿

二、二人を結んだ砂浜祭り
あの日と同じ　花火です
北緯四十度四十分　フロム百石
トゥ　ニューヨーク
離れて知るのね　底なしの愛
浮気はだめよと　砂に書く
私をわらう　おしどり鴎

三、羨(うらやま)しいのよ　白鳥たちが
私は飛べない　恋の鳥
北緯四十度四十分　フロム百石
トゥ　ニューヨーク
銀杏の落葉を　便りに添えて
あなたにあげたい　里心
私はとても　渇いています

作詞：星野　哲郎
作曲：関野　幾生
編曲：小杉　仁三

一、ここはほんとに　日本(にっぽん)なのと
訊(たず)ねる旅の　蝶もいる
白鳥遊ぶ　湖に
自由の女神が　影映す
絵の町　野の町　森の町
あゝ誰もが一度
住んでみたい町

二、赤いイチゴの　実もうれる頃
東風(やませ)も和(なご)む　二川目(ふたかわめ)
地元の人と　旅人が
しぶきを分けあう　地曳網(じびきあみ)
空には輝く　いわし雲
あゝ手をとり合って
夢をさぐる町

三、根岸詣りの　願いも叶い
嬉しい噂　きく秋は
コスモス咲いて　黄金の
稲穂にとびかう　赤とんぼ
陽(ひ)の町　実の町　詩(うた)の町
あゝ誰もがずっと
住んでみたい町

（平成11年度町制施行70周年記念事業）